

氏名	福田奏子		
学位の種類	博士（障害科学）		
学位記番号	博甲第	8322	号
学位授与年月	平成 29年 5月 31日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
審査研究科	人間総合科学研究科		
学位論文題目	盲幼児児童におけるはめこみ構成課題に関する研究 —課題の難易度および関連する要因の検討—		
主査	筑波大学准教授	博士（心身障害学）	佐島 毅
副査	筑波大学教授	博士（教育学）	安藤隆男
副査	筑波大学准教授	博士（教育学）	小林秀之
副査	筑波大学教授	博士（教育学）	川間健之介

論文の内容の要旨

福田氏の博士学位論文は、盲児用の構成課題を開発し、課題難易度について検討するとともに、構成課題の達成と概念理解・日常生活動作・日常生活空間認知との間に関連性があるかどうか検討することを目的としたものであり、その要旨は以下のとおりである。

第1章の本研究の背景では、著者は、構成課題について国内外の先行研究のレビューを行い、構成課題は幼児児童の知的機能の評価に関する主要な領域であるとともに空間認知能力獲得の基礎となる活動であること、晴眼児を対象とした研究は多数あるのに対して盲児では先行研究がほとんどないこと、一般的な知能検査等における構成課題は盲児に適用することができず盲児用に課題を工夫することが必要であることを示した。その上で、著者は、盲児における指導法や評価法の基礎的知見としての本研究の意義を述べている。

第2章では、著者は、盲児用の構成課題としてのはめこみ構成課題を開発し、それ以降の研究で用いる教材の条件および課題難易度に影響する要因を検討するために、触運動感覚によって操作しやすい教材の条件（研究1）および課題難易度（研究2）について事例的に検討している。その結果、操作しやすい教材の条件については、今回対象となった盲幼児3名においては、45 mm基尺の大きさ、12 mmの厚さ、4 mmの立ち上がり、3 mmのあそびのものが触運動感覚を通して操作しやすいことを明らかにしている。また課題難易度に影響する要因については、はめ板の提示順序および同形異形要因が影響することを明らかにしている。

第3章では、著者は、研究2の知見に基づき対象者数と課題数を増やし、四角形課題（研究3）および三角形課題（研究4）について探索的に課題難易度を検討している。その結果、盲幼児児童19名を対象とした四角形課題の難易度の検討においては同形異形要因が影響することを示している。また盲幼児児童28名を対象とした三角形課題の難易度の検討においては同形異形要因と構成要素数要因が影響

するとともに、四角形課題に比して三角形課題は顕著に難しいことを明らかにしている。

第4章では、研究2および研究3において得た結果に基づき課題難易度に及ぼす要因に関する仮説をたてて課題数を絞り、盲幼児児童39名を対象に仮説検証的に検討している(研究5)。その結果、課題難易度には分割次元数、同形異形要因、はめこみパターン数が影響を及ぼし、その難易度は、①一次元同形課題、②二次元同形課題、③二次元異形正答パターン複数課題、④二次元異形正答パターン単数課題の順に高くなることを明らかにしている。その上で、研究5で実施したはめこみ構成課題の達成と対象児における概念理解・手指操作を伴う日常生活動作・日常生活空間認知との関連について盲幼児児童27名を対象に検討している(研究6)。その結果、はめこみ構成課題の達成数が多いほど概念理解、手指操作を伴う日常生活動作、日常生活空間認知の得点も高いこと明らかにし、はめこみ構成課題の達成とこれらの要因との間には関連のあることを示している。

第5章の総合考察では、これらの結果をもとに、盲児の構成課題に関する知見として以下のことを著者は提言している。具体的な提言内容は、①教材を作成する際には課題のねらいという観点から大きさや厚みやあそびなどの教材の条件を工夫することが重要であること、②課題順序性には一次元課題、二次元同形課題、二次元異形課題という3つの発達段階があり、この3つの段階から対象児の空間に関するイメージの発達段階を捉えるとともに、指導においてははめこみパターン数要因・提示順序の観点からスモールステップを組んで系統的な指導を行うことが重要であること、③構成課題における空間認知能力は、日常生活空間における位置関係の把握や、見えない中で方向をイメージして行う日常生活動作の基礎となる力であり、構成課題をはじめとした机上における認知学習においてレディネスを形成することが重要であること、である。

審査の結果の要旨

(批評)

福田氏の研究は、国内外において盲児の構成課題に関する系統的研究が存在していない中で、触運動感覚によって実施可能な構成課題としてのはめこみ構成課題を開発し、その課題難易度に及ぼす要因を初めて明らかにした点で、盲児の空間認知能力の評価および系統的指導に資する極めて重要な研究である。盲児に適用可能な動作性の知能検査・発達検査が開発されていない点を踏まえると、本研究の心理学的・教育的意義は大きい。また、はめこみ構成課題と概念理解・日常生活動作・日常生活空間認知との関連性を示したことは、盲児のアセスメントツールとしての構成課題の応用可能性を示す点からも、高く評価することができる。

平成29年3月22日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士(障害科学)の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。